身体表現活動による母子間コミュニケーションの変容

高野　牧子

要　旨

身体表現活動（単発講座）による母子間コミュニケーションについて、創造的身体表現指導による効果を検証するために、実際に開放的で創造的身体表現活動（開放群）と座ったままで静かに行う既成の手遊びなどの活動（沈静群）を実践し、活動前後に母子による自由遊びがどのように変容するか、VTR 分析をもとに比較検討した。その結果、開放群の方が母子間のコミュニケーションは活発になった。母子間のコミュニケーションが促進される要因として、母子間で同じ動きを模倣し合うことが重要な要因になっている可能性を指摘した。

キーワード：身体表現　母子間コミュニケーション　模倣

１．目的

母子での身体表現活動によって、どのような効果が得られるのか、それを検証するために、母子間の相互作用を図る指針を検討し、身体表現活動前後に具体的にどのような母子間の変容があったか、さらに母子間の相互作用を推進していく要因は何なのか、考察することを目的とする。

評価指針について先行研究では、子どもの発達診断の中に、子どものコミュニケーション能力の評価項目が含まれることが多い。津守 (1961) は乳幼児精神発達診断法を提案し、日常の生活場面から各項目を採集し、社会性の中で「おとなとの関係」として子どもの行動の評価項目を示している。小林（2006）はムーブメント教育・療法の評価において、MEPA － R 評定項目を発達段階に応じて提起し、その中で子どもの対人関係も評価しているが、これも子ども自身の行動発達を評価するものである。また、軽度発達障害を診断する WISC- Ⅲにおいて、「対人的かかわり」の項目では座り方や姿勢の保持、対人的な距離の取り方、表情、うなずきなど非言語的なかかわりが視点となっているが、これも子ども自身の行動を評価するものである。従って、これらは子ども自身の発達や行動を評価するものであり、母子間のやり取りを評価するものではない。二者間（子ども－親）のやりとりを通したコミュニケーション行動を評価する指標ではない。

INREAL（Inter Reactive Learning and Communication）は大人と子どものやりとりをビデオ分析によってトランスクリプトで記述し、マクロ、ミクロ分析により目標をたて、大人の反応を変えていくことで、子どもの言語発達を促す方法である。大人の反応の具体的な方法として言語心理学的技法があげられ、興味深いが、大人の身体での動きによる関わりへの方法ではない。

このように幼児期の母子間の動きを伴う相互作用を図る指標は見当たらない。そこで本研究は母子で身体表現活動を実施して指標となる要素を検討し、活動の前後で母子間の相互作用がどのように変容するか考察していくこととする。

２．方法

（１）調査方法検討のための事前調査

設定課題は、多様な遊びが可能であると推測される薄い半透明の布（約１ｍ×１ｍ正方形、約 45㎝× 150㎝長方形など）とリボンを多数準備し、「親子で布やリボンで自由に遊ぼう！」とした。

事前調査①

日時　2007 年 10 月 24 日

場所　甲府市北部幼児教育センター

（所　　属）

１）山梨県立大学

方法　2歳児対象「親子ふれあい遊び、表現遊び」の前後に、特定の親子2組に上記課題を示し、ＶＴＲ撮影で記録した。

結果　ほとんど、子どもが動かない

考察　カメラが近く、実験的だと感じられるような特別の空間（カメラが近い、見ている人が非常に多いなど）だと、緊張して動かない。活動の事前事後でほとんど差がない。

事前調査②

日時　2008年1月23日

場所　アネシス（甲府市）

対象　2歳児親子15組

方法　2歳児対象の「親子ふれあい遊び、表現遊び」の開始前に部屋の中央に布とリボンの入ったかごを置く。到着した親子から自由に遊ぶ。

結果　少しあそんですぐに飽きる、あまり興味を示さず、動かない

方法　「親子ふれあい遊び、表現遊び」活動後半に同じかごを置き、「親子で布やリボンで自由に遊ぼう！」と指示する。

結果　親子で様々な遊びを創造し、5分以上継続して楽しんだ。

考察　活動前後で大きな差が生まれたので、親子でふれあい、発散的で創造的な活動をして心身が解放された後では創造性豊かになるといえる可能性がある。ある程度、広い空間でカメラ1台を離して設置したため、心理的な緊張が生まれなかった。従って、自由な雰囲気を保障することが必要である。

事前調査③

日時　2008年2月1日　（年間10回講座の最終回）

場所　富士河口湖町子ども未来創造館

対象　平成19年度に2歳児になる子どもと保護者　40組

方法　事前調査②と同様、活動前に来た親子から同じ課題を提示

結果　親子、あるいは　子どもだけでいろいろな遊びをした

方法　活動後半　事前調査②と同様　活動後半にも「自由に遊ぼう」という時間を設ける

結果　リボン、布でも親子でいろいろな遊びを生み出す

考察　・活動の前後でも自由に親子で遊びを生み出せるのは、回数を重ね、空間にも、活動内容にも慣れており、実験的な特別な空間ではなく、自由に活動できる雰囲気が保証されてこの課題で様々な遊びが生まれる一方、親子による差も大きい。従ってこの同一課題で様々な親子の様子を調査できる可能性が高い

・カメラ1台が離れて設置してあり、また10回講座の度に撮影してきたので、子どもたちもカメラに慣れ、意識しない。しかし、カメラ1台ではそれぞれの親子の相互作用を撮影することができない。

・概ね、親子による同じ遊びの長さは2分以内で、次々と展開したり、停滞したりする

以上より、3回の事前調査により、調査方法を検証し、次の知見が得られた。

① 実験的な空間で、親子一組で個別に実施では、過度の緊張を強いる。

② 課題「親子で布やリボンを使って自由に遊ぼう！」で自由な雰囲気を保障する

③ 概ね親子の自由遊びは2分程度が目安となり、活動が展開または停滞する

（2）本調査

日時　2008年2月27日（水）10:00～11:30

場所　Ｊ幼稚園（甲府市）

対象　未就園児（4月より3歳児クラスに入園予定）とその母親　48組

これを無作為に開放群と沈静群の2グループに分けて実施

記録　固定カメラ1台　手持ちカメラ8台

母子間の自然なやり取りを抽出するために、実験的な空間ではなく、設定した広い空間で母子が自由遊び（リボンや布を使用）を行っている中へ、手持ちカメラを8台入れ、各カメラ3組の母子を2分間連続して撮影することとした[1)]。撮影は最初と最後

の部分で実施し、中間に親子での身体表現遊びの活動を行った。

方法　幼児とその母親が開放的で自由な全身運動を伴う身体表現活動（開放群）と、落ち着かせる時に一般的に行う手遊びなどの活動（沈静群）を実施し、各活動の前後で母子間の自由遊びがどのように変容するのか、比較分析する。活動内容の詳細は**表１**に示す。開放群の前半は身体部位を意識して触れながら、くすぐりや頬ずりなど、スキンシップを入れ、全身運動を主に、自由かつ創造的な活動で構成し、移動運動も入れ、親子一緒に行うようにした。これに対し、沈静群は小筋群運動（手指による手遊びを中心）とし、指導者が示した既成の動きをするように指示し、座位で移動せず、子どもだけで行う活動とした。

分析方法　以下の２つの方法を行った。

1）自由遊びおける身体表現による母子間コミュニケーションのVTR分析による量的分析

身体表現活動の前後の自由遊びの母子間の様子を下記の８項目について、分析者２名[2)]で検討し、５秒ごとにそれぞれの項目について親子の状態を記録した。そして各親子の２分間の平均値を算出した。

〈量的分析項目〉

① 視線：違うところを見ている０　親が子を見る１　子が親を見る２　共同注視３　互いを見つめ合う４

② 体幹の向き：親子別方向０　親子同一方向１　親子向かい合う２

③ 表情（主に笑顔）：　親子笑顔なし０　親のみ１　子のみ２　親子で微笑み合う３

④ 身体接触：なし０　親が子にふれる１　子が親にふれる２　親子でふれあう３

⑤ 子どもの姿勢：寝る１　座位２　立位３　ジャンプ４

⑥ 親の姿勢：寝る１　座位２　立位３　ジャンプ４

⑦ 移動：移動なし０　親だけ移動１　子だけ移動２　親子で移動３

表１「活　動　内　容」

時間３０分	内　　容		撮影・活動意図
（８分）	布やリボンを親子に配布 「リボンや布を使って親子で自由に遊んで下さい」 自由に親子で遊んでもらう　BGM　CD（アフリカの民族音楽）		撮影開始 カメラ１台につき １組２分間　×３組
（約１５分）	〈開放群〉 円になって座る ウォーミングアップ 「そっとそっと」ア ふれあいあそび 「ちっくんハチさん」CD 「お母さんのおふね」ア 身体表現あそび 「お母さんと変身ドライブ」P 走る－止まる いろんな形で止まる ヒヨコになって ゾウになって カンガルーになって	〈沈静群〉 方形に座る 手あそび 「はじまるよ」ア お名前とお返事 「あなたのお名前は」P 手あそび 「5人のお友だち」CD 「たまごたまご」 リズムあそび （卵マラカス） 「大きい音小さい音」ア 「三三七拍子」ア	〈開放群〉 開放的 全身運動 自由・創造的 移動あり 親子一緒に動く 〈沈静群〉 沈静　内向的 手・指先の運動 指示・既成 移動なし 子どもだけで動く
（８分）	布とリボンを親子に配布 「親子で一緒に、リボンや布で自由に遊んで下さい」 リボンや布を渡し、自由に親子で遊んでもらう BGM CD（アフリカの民族音楽）		撮影開始 １組２分間　×３組 最初に担当した同じ親子を撮影する

＊伴奏はCDはCD, Pはピアノ伴奏、アはアカペラを示す。

⑧　相互作用：親子とも何もしない、またはそれぞれで活動０　親が子どもに働きかける１　子が親にはたらきかける２　親子で一緒に遊ぶ３

2）自由遊びおける身体表現による母子間コミュニケーションのVTR分析による質的事例分析

動きに特に着目し、Labanの動きの分析視点を援用し、下記の項目について、母子間での変容について、その詳細をＶＴＲ分析する。

〈質的分析項目〉

身体部位（視線・視線の共有／見つめあう・同じものを見る・同じ方向を見る表情／微笑む・笑う・笑いあう）

動き　具体的なaction

ダイナミクス　時間性（同時性、即応、不規則）力性（強弱、剛柔、軽重）

空間（体の向き、レベル、空間軌跡、移動経路）

関わり（一方的な働きかけ／相互作用／拒否・拒絶）

３．結果および考察

（１）自由遊びおける身体表現による母子間コミュニケーションのVTR分析による量的分析

VTRに収録できた件数は、開放群が19件（2組の親子が一緒に遊んだケース、活動前のみの参加などは削除）、沈静群が24件であった。

各項目について、活動前と活動後の平均値と分散を**表２**に示した。開放群では、表情（笑顔）、身体接触、子どもの姿勢、母親の姿勢、移動、相互作用とほとんどの項目で、活動後には、平均値の上昇があり、母子間での遊びが活発になっていることが認められる。これに対し、沈静群は、平均値が上昇したのは身体接触と移動のみであった。沈静群の活動前の値が、開放群と比べ、身体接触以外は高い値を示しているので、活動前に活発に親子で遊んでいたので、上昇傾向が少ない可能性が示唆される。

そこで、平均値の差に優位性があるか、統計的に検討する。本研究では標本数が少なく、正規分布に従っていないので、対応のあるノンパラメトリック検定を実施した。統計処理はSPSS（ver.1.7）を使用した。開放群（**表３**）については、移動項目に対し、有意な差が認められた（p＝.035）。つまり、活動前よりも活動後の方が移動については活発になったことを示している。これに対し、沈静群（**表４**）においては、「視線」「体幹」「子どもの姿勢」の３項目で、有意差が認められた（p＝.004, p＝.031, p＝.030）。活動前に比べ、活動後では視線の交わりや体幹が向かい合うことが減り、子どもも不活発になり、活動が沈静方向に向かったのではないかと推測される結果を得た。

次に各指標から検討していく。

表２　活動前後における変容（平均値）

			視線	体幹の向き	表情（笑顔）	身体接触	子どもの姿勢	母親の姿勢	移動	相互作用
活動前	開放群	平均	1.53	0.79	0.41	0.57	2.58	2.13	0.12	1.39
		分散	0.18	0.12	0.11	0.48	0.15	0.08	0.06	0.58
	沈静群	平均	1.80	1.06	0.64	0.22	2.89	2.59	0.56	1.83
		分散	0.22	0.16	0.18	0.10	0.08	0.15	0.58	0.61
活動後	開放群	平均	1.45	0.78	0.61	0.71	2.71	2.27	0.49	1.68
		分散	0.33	0.31	0.38	0.74	0.21	0.14	0.36	0.66
	沈静群	平均	1.52	0.80	0.51	0.42	2.57	2.61	0.72	1.73
		分散	0.21	0.22	0.23	0.29	0.15	0.07	0.38	0.80

表３　開放群におけるノンパラメトリック検定結果

順位

		N	平均ランク	順位和
視線後 － 視線前	負の順位	11 [a]	9.73	107.00
	正の順位	8 [b]	10.38	83.00
	同順位	0 [c]		
	合計	19		
体幹後 － 体幹前	負の順位	12 [d]	7.46	89.50
	正の順位	6 [e]	13.58	81.50
	同順位	1 [f]		
	合計	19		
笑顔後 － 笑顔前	負の順位	6 [g]	8.33	50.00
	正の順位	11 [h]	9.36	103.00
	同順位	2 [i]		
	合計	19		
身体後 － 身体接触前	負の順位	9 [j]	7.00	63.00
	正の順位	7 [k]	10.43	73.00
	同順位	3 [l]		
	合計	19		
子姿勢後 － 子姿勢前	負の順位	6 [m]	12.25	73.50
	正の順位	13 [n]	8.96	116.50
	同順位	0 [o]		
	合計	19		
母姿勢後 － 母姿勢前	負の順位	3 [p]	4.33	13.00
	正の順位	7 [q]	6.00	42.00
	同順位	9 [r]		
	合計	19		
移動後 － 移動前	負の順位	3 [s]	6.33	19.00
	正の順位	11 [t]	7.82	86.00
	同順位	5 [u]		
	合計	19		
相互後 － 相互作用前	負の順位	7 [v]	9.00	63.00
	正の順位	12 [w]	10.58	127.00
	同順位	0 [x]		
	合計	19		

検定統計量 [c]

	視線後 － 視線前	体幹後 － 体幹前	笑顔後 － 笑顔前	身体後 － 身体接触前	子姿勢後 － 子姿勢前	母姿勢後 － 母姿勢前	移動後 － 移動前	相互後 － 相互作用前
Z	－ .483 [a]	－ .174 [a]	－ 1.254 [b]	－ .259 [b]	－ .865 [b]	－ 1.478 [b]	－ 2.104 [b]	－ 1.288 [b]
漸近有意確率（両側）	.629	.862	.210	.796	.387	.139	.035	.198

結果：開放群においては、移動項目に対し、有意な差が見受けられた（p=.035）。

表４　沈静群におけるノンパラメトリック検定結果

順位

		N	平均ランク	順位和
視線後 － 視線前	負の順位	20 [a]	12.60	252.00
	正の順位	4 [b]	12.00	48.00
	同順位	0 [c]		
	合計	24		
体幹後 － 体幹前	負の順位	16 [d]	13.06	209.00
	正の順位	7 [e]	9.57	67.00
	同順位	1 [f]		
	合計	24		
笑顔後 － 笑顔前	負の順位	14 [g]	12.25	171.50
	正の順位	9 [h]	11.61	104.50
	同順位	1 [i]		
	合計	24		
身体後 － 身体接触前	負の順位	10 [j]	9.60	96.00
	正の順位	14 [k]	14.57	204.00
	同順位	0 [l]		
	合計	24		
子姿勢後 － 子姿勢前	負の順位	14 [m]	13.82	193.50
	正の順位	8 [n]	7.44	59.50
	同順位	2 [o]		
	合計	24		
母姿勢後 － 母姿勢前	負の順位	10 [p]	12.75	127.50
	正の順位	13 [q]	11.42	148.50
	同順位	1 [r]		
	合計	24		
移動後 － 移動前	負の順位	8 [s]	12.81	102.50
	正の順位	14 [t]	10.75	150.50
	同順位	2 [u]		
	合計	24		
相互後 － 相互作用前	負の順位	9 [v]	14.89	134.00
	正の順位	14 [w]	10.14	142.00
	同順位	1 [x]		
	合計	24		

検定統計量 [c]

	視線後 － 視線前	体幹後 － 体幹前	笑顔後 － 笑顔前	身体後 － 身体接触前	子姿勢後 － 子姿勢前	母姿勢後 － 母姿勢前	移動後 － 移動前	相互後 － 相互作用前
Z	－ 2.915 [a]	－ 2.160 [a]	－ 1.019 [a]	－ 1.543 [b]	－ 2.176 [a]	－ .319 [b]	－ .779 [b]	－ .122 [b]
漸近有意確率（両側）	.004	.031	.308	.123	.030	.749	.436	.903

結果：沈静群においては、視線・体幹・子どもの姿勢の３項目で、有意な差が見られた（p=.004, p=.031, p=.030）。

①視線

コミュニケーションにおけるアイコンタクトの重要性は、多く指摘されているが、今回の調査では、開放群、沈静群共に平均値は下がっている。物を介在した自由遊びの場面であり、一緒に遊んでいても、母子間で見つめ合うよりも、物を共同注視するケースが多く見られた。また電車ごっこのようにそれぞれが進行方向を向いている場合には、それぞれが違うところを見ているケースも多い。その結果、視線の値は両群ともに下降したが、ＶＴＲ分析により、詳細にみていきたい。

②体幹の向き

開放群、沈静群共に平均値は下降傾向を示した。本調査では、親子別方向０点、親子同一方向１点、親子向かい合う２点としたが、電車ごっこ遊びのように同一方向でも活発に遊んでいるケースもあり、必ずしも指標が活発化を示すものではない。また、D. モリスが最も安定した関係として指摘する 45 度の方向も親子で多く認められた。従って、単純化した数値だけではなく、VTR 分析において、さらに詳細に個別の事例についてみていく必要がある。

③表情（笑顔）

開放群の平均値が上昇したのに対し、沈静群は平均値が少し下がった。開放群は活動後には、親子で十分に遊びを楽しんでいたことが笑顔の増加から把握できる。その一方、沈静群の笑顔の低下していることを鑑みると、中間で行った開放的な親子での身体表現活動では心を解放し、自由な雰囲気の中で、創造的な活動を行った事が何らかの影響を及ぼしているのではないかと推測される。

鯨岡（1999 : 145）は乳児期初期の子ども―養育者の関係性の中で、微笑み合うことに着目し、重要な意義づけを行っている。引用する。

> われわれは一組の子どもと養育者が互いにまなざしを合せて微笑み合う場面のエピソードを取り上げて、それは、いまここでその二者が一つの気分を共有し一体感を感じていることの表れであり、それこそが誕生以来、一組の子どもと養育者が目指してきた情動共有の、そして「共にある」あり方の一つの典型的なかたちをなすものである。

母子間で微笑み合い、情動を共有し、「共にある」時に、共振の行為も生まれてくると考えられる。様々な表情がある中で、笑顔を手掛かりにして、個別の事例についてもみていくこととしたい。

④身体接触

両群共に平均値は上昇した。しかし遊べなかった母子の多くは、母親にべったりはりつき、身体接触はあるものの、相互にやりとりする姿は少なかった。また母子で楽しそうに遊んでいる場合でも、物を介在する自由遊びであったため、直接の身体接触は少なかった。従って、より個別データで質的にどのような身体接触であったか、詳細に見ていく必要がある。

⑤子どもの姿勢、⑥母親の姿勢

開放群の平均値は子どもの姿勢、母親の姿勢ともに上昇した。座り込んで、遊びが停滞していた活動前に比べ、身体表現活動後には子どもは立位やジャンプが増加し、母親も立位が増えたことによる。つまり、遊びがより活発になったことを示している。これに対し、沈静群の平均値は、子どもの姿勢は活動前には 2.89 と開放群より高い値であったが、活動後には 2.57 と下がり、開放群とは逆の結果が出た。母親の姿勢はほとんど変化しなかった。中間で行った身体表現活動で、開放群は立位やジャンプも含まれていたのに対し、沈静群は座位中心の活動であった。従って、立位で活発に遊んでいた幼児に対し、「～～手はお膝」などのように静かにする手遊びなどを行うことによって、子どもたちはその後も静かに落ち着いて座って遊んだのではないかと考えられる。つまり子どもの姿勢は中間の身体表現活動に大きく影響されると推測される。

⑦移動

両群ともに上昇しているが、特に開放群の平均値は 0.12 から 0.49 と高まった。開放群の活動前には、座位でほとんど移動がない状態であ

り、活動後には、電車ごっこや布のセンターに子どもが座り、母親が布を引っ張るそり遊びなど、活発な遊びを展開する母子も出現し、移動が増加した。

⑧相互作用

沈静群は、活動前が1.83、活動後は1.73とほとんど変化がなかったのに対し、開放群は1.39から1.68と上昇がみられる。心身を解放し、母子で工夫しながら、動く身体表現活動によって、自由に遊ぶ課題においても、様々なアイディアを母子で共有し、遊びを共に創りだし、楽しむことへ影響を与えたのではないかと推測される。

個別事例を通して、さらに検討を進めて行くこととする。

（2）自由遊びおける身体表現による母子間コミュニケーションのVTR分析による質的事例分析

事例1は開放群で、身体表現活動後に母子間の相互作用が活発になった事例である。**表5**に示すように視線、体幹の向き、笑顔、子どもの姿勢、相互作用が増加している。

身体表現活動前、母子間で視線が合わず、表情も固いままであり、母子間のやりとりも、子どもの関心に関わらず、母が思いついたことを一方的に行っているため、成立していない。体幹の向きは赤ん坊の方を母子共に向いており、関わりも子どもが親に寄り添っているが、親子で一緒に遊ぶことはなかった。

これに対し、身体表現活動後には視線は共に布を追い、母子で見つめあい、笑顔が多い。キャッチボールを繰り返し、双方向のやりとりが活発である。体幹の向きは向かい合っており、親子一緒に関わり、十分遊んでいる。特に母親の働きかけはキャッチボールが続くような促しとなり、子どもとの遊びを一緒に楽しもうとする共感性が認められる。

母子間のやりとりを**図1－1，1－2**に作成した。左から右へ時間が進行し、上段が母親の行動、下段が子どもの行動を記入してある。太い矢印は、片方からの働きかけを示し、両矢印は相互のやりとりによる母子での遊びが行われたことを示す。さらに矢印がUターンし、×がついているものは、片方からの働きかけについて、拒否、拒絶あるいは無視したことを表した。破線の矢印は視線を示し、破線の両矢印は母子で視線が合い、見つめ合った事を示す。笑顔のマークは笑った事を示し、その位置で、上段の上は母親の笑顔を、下段の下は子どもの笑顔、そして中間の笑顔マークは母子で笑い合った事を表した。また、母子以外の第3者との関わりがあった場合には、最下段に加えた。

事例1【215】

（活動前）子どもは母に寄り添って立ち、前にいる赤ちゃんにリボンを振り続ける。母は子どもの肩や腰、頭に布を巻こうとするが、子どもは手で布を払う。母は布を自分の膝に広げ、子どもが振っていたリボンを取り、布で包み、子どもに見せる。

（活動後）母と子どもで布をキャッチボール。子どもが布を拾い、母に近寄り、他の子を見る。母は話しかけて、布を下から打って促す。子どもは下から両手で布を投げ、片手でつく。母は来た布を片手でつき、子どもへ返す。子どもはキャッチできて笑い、ピョンピョンはねる。子どもが立ったまま動かないと、母は子どもの目の前で布を振り、子どもの反対側に布を落とす。子どもは布を拾い、母に投げる。

表5　活動前後の変化（事例1【215】）

事例215	視線	体幹の向き	笑顔	身体接触	子どもの姿勢	母親の姿勢	移動	相互作用
活動前	1.38	0.25	0.58	1.33	3.00	2.00	0.00	1.13
活動後	2.75	1.00	1.38	0.26	3.17	2.00	0.08	2.54
変化	1.38	0.75	0.79	－1.07	0.17	0.00	0.08	1.42

図１－１　事例１【215】活動前の母子間のやりとり

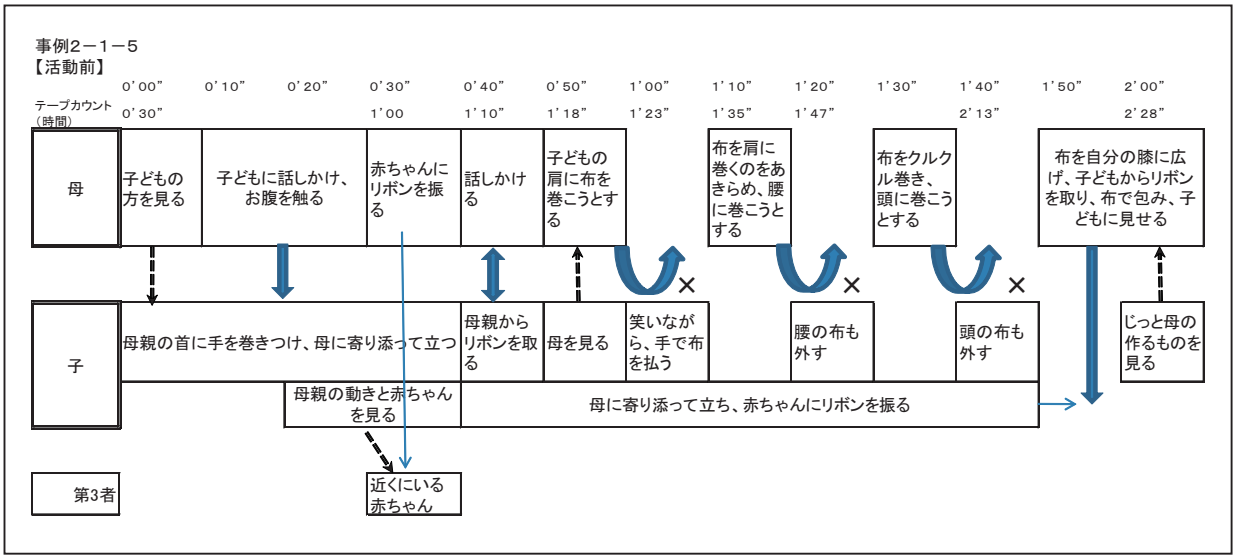
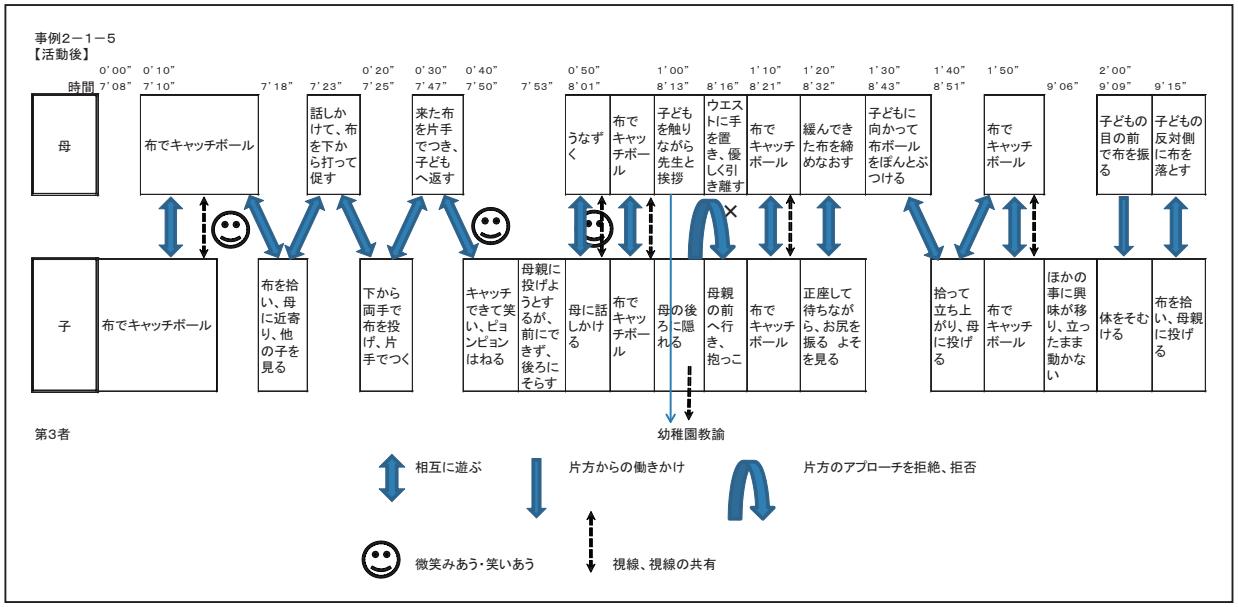


図１－２　事例１【215】活動後の母子間のやりとり



【考察】

「母親が～をしてあげる」、例えば、「リボンを結んであげる､布を巻いてあげる」のような行為、する人、される人という関わり方の場合、子どもが受動的な立場になり、遊びとしてその後、発展していかない。

子どもにも出来るような動きを母親が示した場合には、子どもがそれを見て模倣し、遊びへと展開していく可能性が示された。しかし、これも子どもの模倣を母親が気づかない場合には､やはり、遊びへと発展していかない。

事例１では、母親がリボンを前にいる赤ちゃんに向かって振る様子を見て、子どももリボンを振り始める。しかし、この子どもの模倣した動きに気づかずに、母親は子どもの体にリボンを結び始める。子どもは赤ちゃんに向かってリボンを振る行為を続け、母親が自分にリボンを結ぶのを拒否しているのだが、母親は気づかずになんとか違う部位にリボンを結ぼうとする。

一方、活動後では、子どもと母親のキャッチボールが始まる。子どもが布を投げると、母親も同じように投げる。また子どもが布を下方から突き上げると、母親も同じように突いて子どもへ返す。さらに子どもがよそ見をして、活動が止まってしまっても、母親が子どもの持っている布を下方から突き上げる行為によって、キャッチボール

遊びが再開される。この場合にはボールにした布を突き上げる、投げるという同じ動きをすることによって、遊びが発展したとみることができよう。

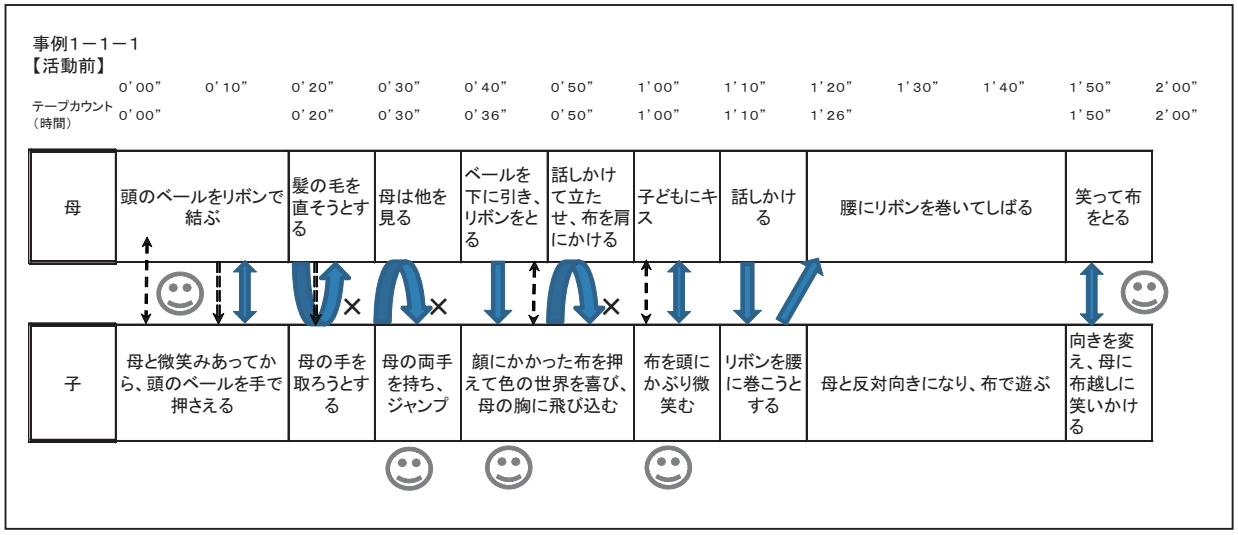
事例２も事例１と同様に、活動前後の母子間のやりとりを**図２－１，２－２及び表６**に示す。以下、各事例について同様に示していく。

事例２【111】

（活動前）母と子どもが向かい合って座り、母が子どもの頭に布を掛ける。子どもは両手を広げて横を向いて待つ。母親がリボンをとり、親子で視線を合わせて微笑みあう。母がリボンを子どもの頭に結ぼうとする。子どもは母の肩に手をかけてから、頭の布をおさえる。子どもの頭にリボンを結び、子どもの額の髪を直す。子どもは左右を見ながら、母親に抱きついてくるが、母親は布をきれいに直そうとする。子どもは布を直すのを嫌がり、母親の両手をとって立ち上がる。母の両手をもって、子どもがピョンピョン跳ねるが、母親は子どもを見ていない。また母が頭の布とリボンを直していると、布が下がってくる。布が外れて顔にかかると、子どもは布から透けて見える色の世界を楽しみ、あちこち見た後、顔に布をつけたまま、母親の胸に飛び込んでいく。母親は話しかけ、子どもを立たせて、布をマントのように首に巻こうとする。子どもが自分で布をすっぽりかぶり、母親を見て微笑む。母親が子どもにキスして微笑み合った後、子どもがリボンを渡す。母親が子どもの胴体にリボンを巻こうとし、子どもは小さく首を横に振る。母親は巻こうとするが、子どもは布を頭から取る。母親はリボンを胴体に巻こうとし、子どもは布を持って反対向きになる。母は子どもの後ろでリボンを結ぶ。子どもは布を開いて立ち、次第に布を細かくゆする。子どもは布を顔の高さに上げる。母は他の子の様子を見ながら結ぶ。母が子どもの向きを変え、向かい合わせになり、微笑みあい、母が言葉をかけて、布を取る。

（活動後）母が座位でリボンをくるくる振り、子どもは向かい合いで立って、リボンをつかもうとする。母が大きくリボンを回し、子どもがリボンをつかもうとする。子どもが布をくるくる回すが、腕にからまる。母親は話しかけて、子どもの腕に布を巻きつける。子どもは一人でぴょんぴょん跳び、母が巻いた布を取る。子どもが布をたたみ、自分の腰に巻こうとする。母は微笑みながら見守る。子どもが布の端を母に渡し、引っ張りっこが始まる。母が布を手繰り寄せ、子どもが引き寄せられて笑いあう。布で引っ張り合いっこを続けて笑いあう。引っ張りっこして、子どもを抱き寄せ、親子で笑う。３回続ける。子どもが布を取り上げて、バンザイしてカメラに笑う。

図２－１，２－２　事例２【111】活動前後の母子間のやりとり



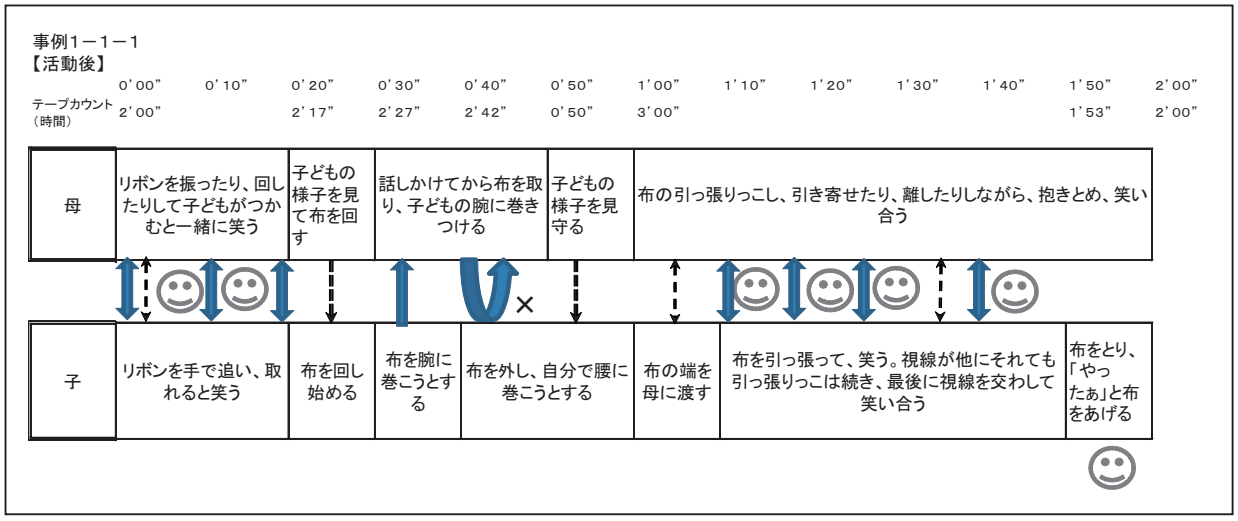


表６　活動前後の変化（事例２【111】）

事例 111	視線	体幹の向き	笑顔	身体接触	子どもの姿勢	母親の姿勢	移動	相互作用
活動前	1.29	1.46	0.25	0.92	2.67	2.00	0.00	1.21
活動後	2.05	1.22	1.39	0.86	3.00	2.00	0.00	2.52
変化	0.75	－0.24	1.14	－0.05	0.33	0.00	0.00	1.31

【考察】

事例２も開放群で、視線、笑み、相互作用が高くなった事例である。活動前、布をベールにしてそれをリボンで縛ることから始めた。リボンが縛りやすいように子どもも布を両手で頭に押さえていることから、母子間のやりたいことは一致している。しかし､その後､子どもは母親の両手をもってジャンプするのだが、母親は子どもではなく、他のところを見ている｡子どもは布が顔にかかり、透き通って見える布の色の世界を楽しむ。母親もその様子に気づき､顔を近づけてキスするのだが、一緒に色の世界を楽しむことはなく、リボンで縛ることに固執してしまう。最後には子どもが振り返り、布を通して母を見て、母親もそれを見て、微笑みあう。

活動後には、母親がリボンを振り、それを子どもが取ろうとする遊びが始まり、よく笑いあっている。子どもは母親の動きを模倣してリボンを回すが、腕に絡まってしまう。それを見て、母親は腕に布を結ぼうとするが、子どもは布を腕に巻きたかったわけではないので、布を腕から外してしまう。子どもは母親がしていたようにきれいに布をたたみ、自分のウエストに巻こうとするが、上手くいかず、その端を母親に手渡す。この様子を母親はしっかり見守り､渡された布の端を持って、引っ張り合いの遊びが始まる。子どもの様子をよく見て、母親が布を持つ、引くという子どもと同じ動きを模倣することによって、布綱引きが楽しく展開された。

ここでは母親が子どもの様子をしっかり見て、それを模倣したか否かで、親子の相互作用に大きく影響したと考えられる。

事例３【317】

（活動前）子どもは母親のそばに並んで座り、母親に話しかけ、母親は布の中心を持ってくるくる巻き、ブーケのようなものを作る。子どもは母の作る布を見て、隣の子どもが布を丸めているのと見比べる。母親は作ったブーケを子どもに渡す。子どもは嬉しそうに隣の子にブーケを見せ、さらにリボンでブーケを縛るように母親に頼む。母は縛りながら、他の母親に話しかける。子どもは母の膝に手を置きながら、他の母親を見る。母親はそのまま子どもに話しかけるが、子どもは母親の話は聞いているようだが、母親の顔を見ず、考え込んでしまう。

（活動後）母親が子どもの頭に布を巻こうとするが嫌がると、布をひらひらさせる。子どももその動きを模倣し、二人で布を持ってひらひら。お母さんの所へ雑巾がけのようにしながら近づく遊び創りだし、展開する。

図３－１　事例３【317】活動前後の母子間のやりとり

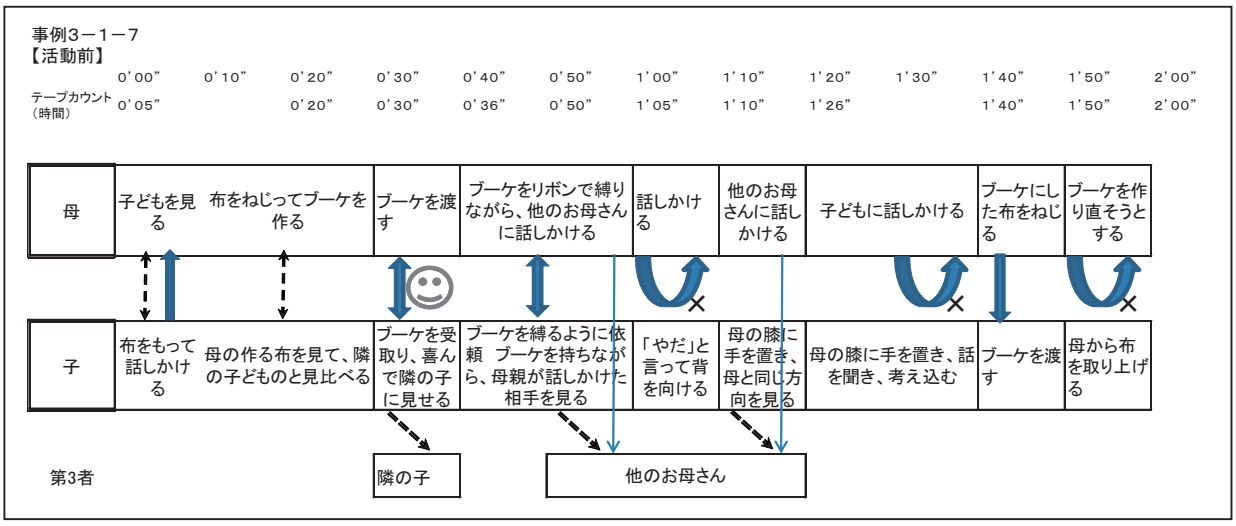


図３－２　事例３【317】活動前後の母子間のやりとり

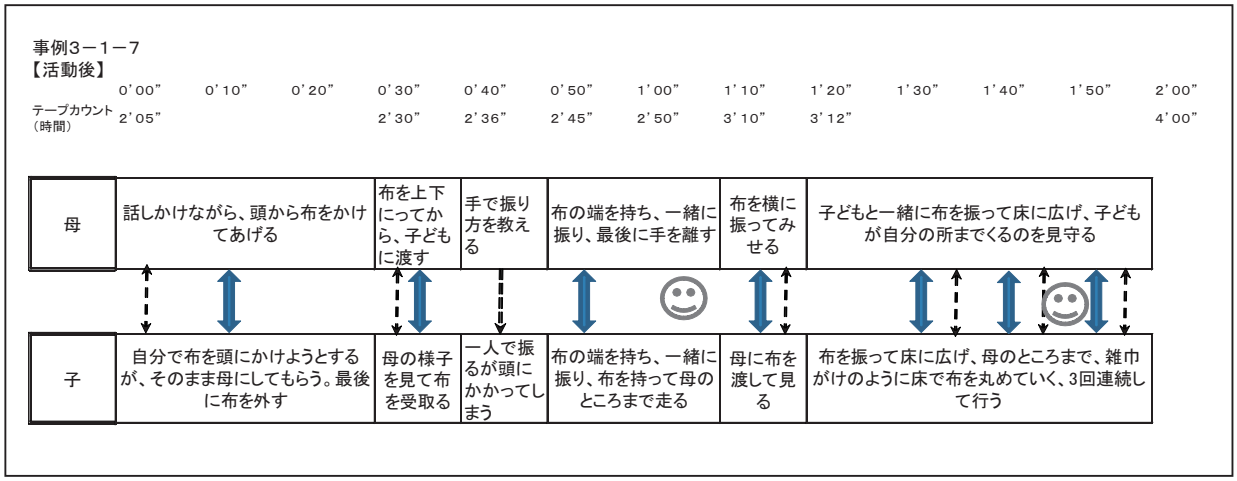


表７　活動前後の変化（事例３【317】）

事例 317	視線	体幹の向き	笑顔	身体接触	子どもの姿勢	母親の姿勢	移動	相互作用
活動前	1.76	0.92	0.12	0.48	2	2	0	1
活動後	1.75	1.83	0.25	0	2.72	2	1.12	2.48
変化	－0.01	0.91	0.13	－0.48	0.72	0	1.12	1.48

事例３も開放群の中で、相互作用が高まった事例で、特に体幹の向きの値が高くなり、これが遊びの活発化に大きく影響したことが推測される。

活動前、母子は寄り添って座り、母親は子どもの依頼に応じて布でブーケのようなものを作り、渡す。その後、母親は隣の母親と会話しながらブーケを縛り、体幹の向きは隣の母親へ向かう。子どもも母親の膝に片手を乗せているのだが、母親が話しかけている他の母親を一緒に見るなど共同注視はあるものの、体幹の向きは違う方向を向いたままであった。

これに対し、活動後は母親が布をひらひらさせ、子どもはそれを見て真似をする。子ども一人ではうまくできない様子を母親は見て、反対側の端を持ってひらひらさせるなど、母親も再度子どもの動きを模倣し、展開していく。ここで、体幹の向きは向い合うようになり、母親も子どもだけをよく見ている。子どもは床に布を広げ、母親のところまで雑巾がけの要領で、床で布をくしゃくしゃと縮めながら、母親のところまで滑り、この遊びを繰り返す。母親も布を広げる時には一緒に端をもってひたひらひらさせて、そっと床に広げて布を置き、一緒に子どもの創りだした遊びを楽しんでいた。

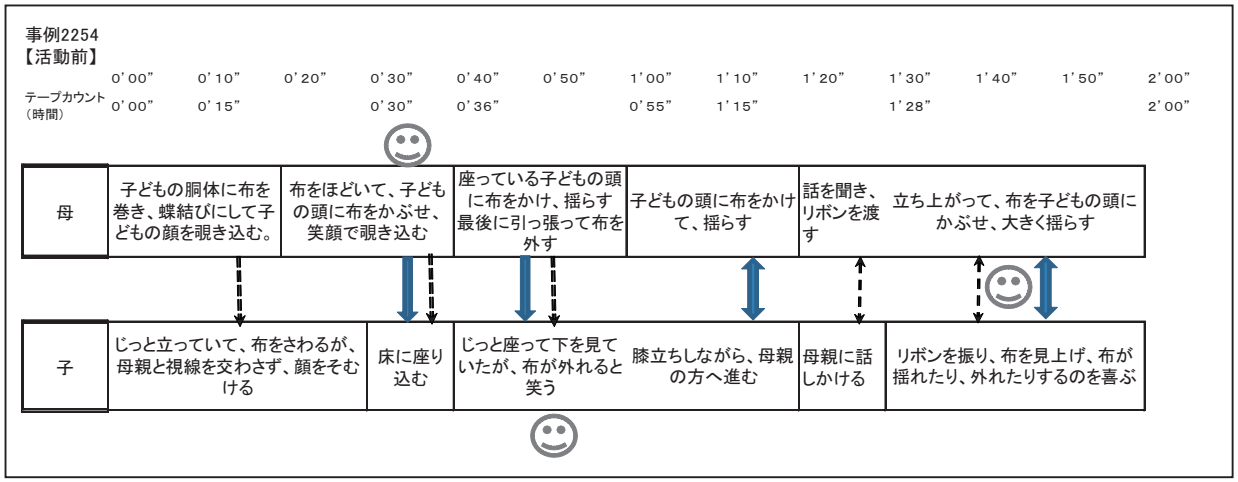
この事例では、体幹の向きがキーポイントになり、布をひらひらさせる動きを模倣し合うことによって展開し、独自の遊びの創出まで展開することとなった。

事例４【2254】

（活動前）母親は子どものウエストに布を巻き、蝶結びにして、子どもの顔をのぞきこむが、子どもは立ったままで母親を見ることなく、顔をそむける。外して頭にかける。子どもの頭に布をのせたまま、端を振る。頭に布をかけて遊ぶ。

（活動後）母が布をひらひらさせ、子どもがつかもうとして、布に乗り、すべってしりもち。お尻を押さえながら立ち上がる。母親がまた布を子どもにかけるようにふるが、座り込んでリボンを振る。座り込んでしまったので、母親が布を子どもにからめる。子どもが布を振り払って、いないいないばぁ。機嫌が直り、立ち上がる。再び、母が布を子どもに向かって振るが、子どもはお尻をさわる。母は子どものそばにいき、お尻をさわる。母の布振りを再開し、子どももリボンを振って布を叩いて遊ぶ。子どもが座り込み、母親も近寄って座り、話しかける。同じ遊びを再開。

図４－１，４－２　事例４【2254】活動前後の母子間のやりとり



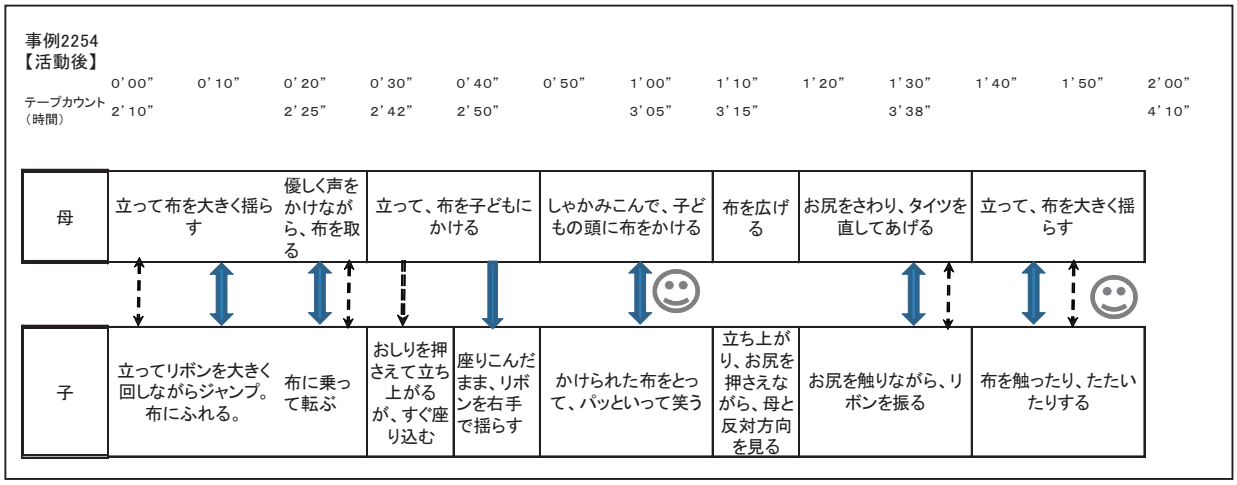


表８　活動前後の変化（事例４【2254】）

事例 2254	視線	体幹の向き	笑顔	身体接触	子どもの姿勢	母親の姿勢	移動	相互作用
活動前	1.76	0.68	0.96	0.24	2.2	2.2	0	0.96
活動後	1.7	1.68	0.3	0.16	2.68	2.64	1.04	1.48
変化	－0.06	0	0.66	－0.08	0.48	0.44	1.04	0.52

【考察】

事例４は沈静群の母子である。相互作用は高まっているが、各項目の数値上の変化は少ない。

活動前には子どもはとても受動的で、母親が積極的に頭に布をかぶせたり、揺らしたりする。子どもは母親のこうした行為を模倣することなく、終わってしまう。

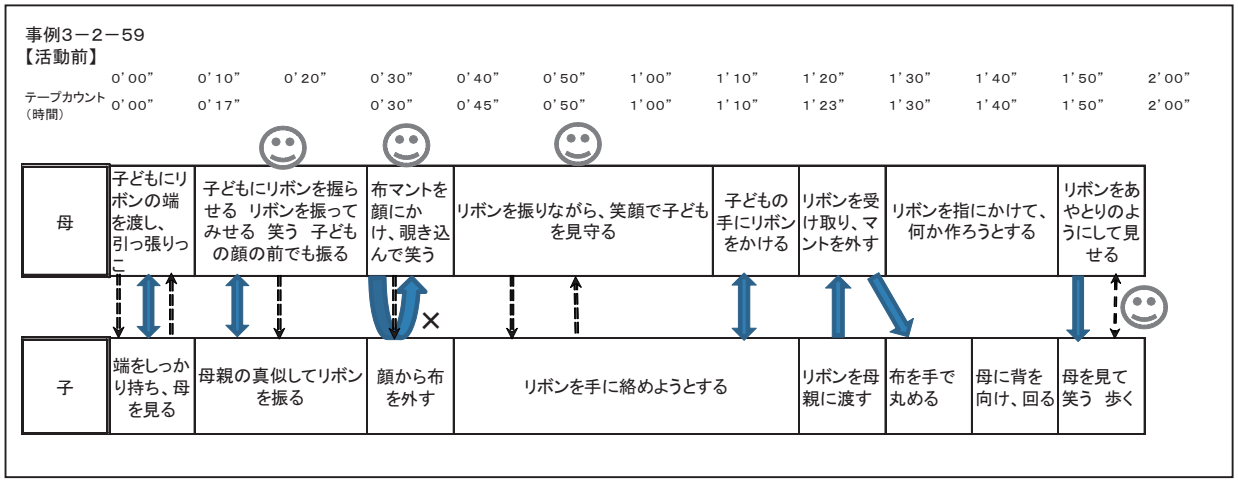
活動後には、母親が立って大きく布を揺らし、回しているのに対し、子どもも動きを模倣し、リボンを同じように大きく回してジャンプしながら、母親の布にリボンで触れる。布に滑って子どもが転んでしまい、子どもは床に座り込むが、母親はその頭に布をかけ、のぞきこむ。子どもも活動前にはただ、頭に布をかけられていたままであったのが、活動後には自分で布を頭からはずして「バッ」と言い、布をかけてはずす遊びが成立する。その後、この事例で着目する点は、活動後の場面で、子どもがお尻を触り、それに母親が気づき、直してあげることによって、遊びが再開されていくところである。子どもが自分の身体部位を触れることは母親にとって、わかりやすいメッセージである。子どもが自分の身体部位に触れる行為から言葉で言えない欲求に、母親が気づき援助していくことによって、相互作用が行われた例だと考えられる。

事例５【3259】

（活動前） 母子で向かい合って座り、リボンの両端をもって引っ張りっこをしている。母子間で視線もあい、母親がリボンを振って見せると、子どもも真似して振ったりしてターンテーキングも成立している。比較的良く笑う母親で、中盤からは子どもがリボンを手に絡めようとする様子を母親は笑顔で見守り、後半には母親もリボンであやとりのようなことをして見せるが、二人での遊びには発展にしていかない。

（活動後） 母親は立って子どもの方を見守り、子どもは背中を向け、手の中で布を丸めているが、すぐに母親の方へ歩き、微笑み合う。子どもは母親の周囲を回りながら、布をふわっと広げ、ちらっと母親を見る。母親も子どもをしっかり見守り、ふわっと広げると微笑むがなかなか二人の視線は合わない。母親がしゃがむと、子どもは母の両手に座る。再び立ち上がった後からは、母親はあまり子どもを見ないで立っており、子どもも母の周囲をぶらぶらと歩きながら、布を丸める。子どもが布を横に振って歩く様子を見て、母親は布をつかもうとし、二人で笑い合う。このように子どもが考えた遊びに母親も気づき、動きで返しているのだが、二人での遊びはなかなか長続きせず、発展していかない。

図５－１，５－２　事例５【3259】活動前後の母子間のやりとり



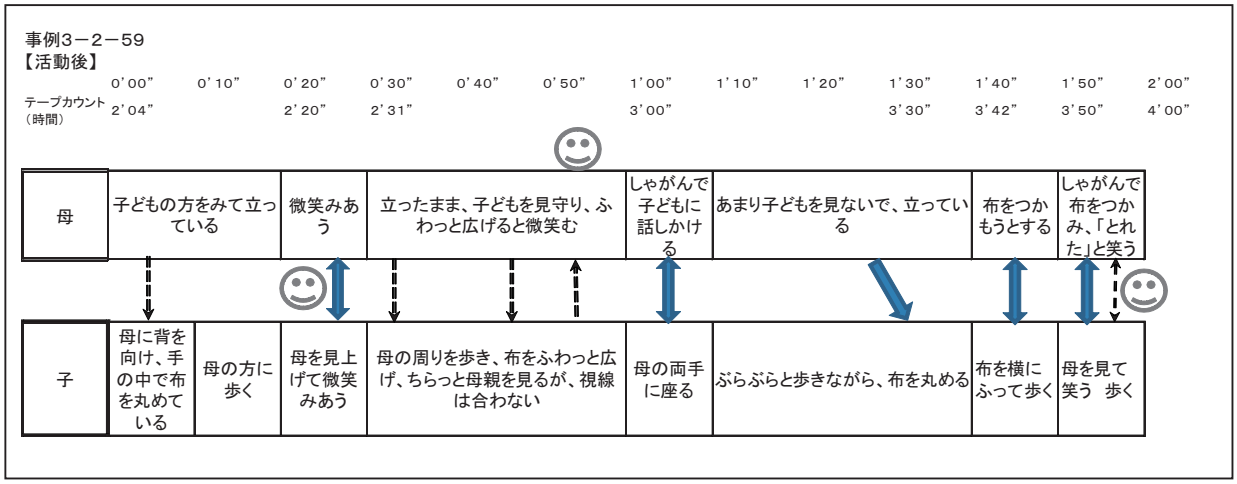


表９　活動前後の変化（事例５【3259】）

事例 3259	視線	体幹の向き	笑顔	身体接触	子どもの姿勢	母親の姿勢	移動	相互作用
活動前	1.56	1.68	0.52	0.00	3.00	2.00	0.08	0.92
活動後	1.25	0.52	0.10	0.17	3.00	2.83	1.45	0.61
変化	－0.31	－1.16	－0.42	0.17	0.00	0.83	1.37	－0.31

事例５は、沈静群に参加した親子で、活動後に相互作用が減ったケースである。視線も体幹も笑顔の値も下がっている。

活動前には視線が交わされ、母親の模倣をしてリボンなど振って一緒に遊ぶ姿が見られた。母親は子どもがリボンを手に絡めるのを見て、自分で

もあやとりのようなことをして見せるのだが、これを子どもは模倣せず、遊びへと展開していかない。

活動後では子どもは立っている母親の周囲をとぼとぼと歩きながら、小さく手の中に丸めた布をふわっと広げてみせるのだが、親子の視線が合わない。母親は子どもを立って見下ろしてはいるのだが、子どもが考えた布をふわっと広げる動きを模倣することもなく、また認めたり、称賛したりすることもなく、積極的に関わって遊ぼうとしない。途中一度、母親が座り込むと、子どもは母親の両手にちょこっと座り込んだ。子どもは座る動作を模倣しながら、子どもから身体接触を強く求めたように見える。このように母親が姿勢を変化させ、子どもの視線に入り込むことで、母子の関係性が少し持てたのだが、これも母親が立ってしまうことで終わり、遊びへの展開には至らない。事例５は､子どもが遊びを提示したにも関わらず、母親による模倣が起きず、遊びが展開していかなかった事例と考えられる。

４．まとめ

自由遊びの中で、母子関係の状態をみていくと次の４タイプに分類できると考えられる。

Type1：子どもも母親も互いの想いを受け止められず、勝手に行動する

Type2：母親が積極的に子どもへ提供するが、子どもが拒否

Type3：子どもが積極的に提案するが、母親が無視

Type4：子どもも母親も互いの想いを受け止め、反応できる

事例１と２は活動前にはType2の状態であったが、活動後にはType4の状態になったと考えられる。視線を交わす、または共同注視といった母子で視線の共有があり、さらに動きの模倣が互いに起こることによって､遊びが発展していった。

事例３はType1に近い状態から、Type4の状態へと変化した事例であり、体幹の方向が向い合い、布への共同注視も増え、布を振る動作を模倣し合うことから、母子での遊びが楽しく展開された。

事例４はType2の状態からType4に近い状態になった事例である。活動前は母親から一方的に働きかけをするのだが、子どもは座ったままで、動きを模倣することがない。活動後半には、母親の動きを子どもが模倣し､遊びが展開するのだが、子どもが転び、お尻を打つ。その後、同じ遊びがさらに続くのだが、子どもがお尻を触り、遊びが止まる。母親は子どものお尻に触れ、優しく撫でる。転倒というアクシデントは起こったものの、身体部位を触るというわかりやすいメッセージで子どもは母親へ伝え、母親もこれに呼応することにより、遊びが継続していく。

事例５はType2あるいはType4の状態から、Type3の状態に変化した事例だと捉える事ができる。活動前、積極的に母親が子どもへリボンを振るなどの動きの提示を行い、子どももそれを模倣することが見られ、互いに微笑みあい、遊びが成立していた。しかし、活動後には子どもが布を広げるなどの動きを提示しているにも関わらず、母親は模倣することなく、遊びへと発展していかない。

これらの事例から、母子間の状態は不変ではなく、可変的なものであることがわかる。身体表現活動による影響は、本調査ではグループの交差検証を実施できず、無作為に分けた２グループであっても、開放群、沈静群が均一であったとは言い切れない。従って、簡単に結論付けることは危険ではあるが、開放群では身体表現活動の前後で大きな変化があり、身体表現活動後に微笑み合うことが増え、母から子どもへの一方的な働きかけから、相互に関わりあって遊べるようになった事例が多く得られた。母子で一緒にふれあい、開放的で活発な全身運動を伴う身体表現活動を行うことにより、からだ全体を通して、共感して楽しむ世界を存分に味わうことによって、母子間の相互作用を促進できる効果があるのではないかと推測される。

さらに､母子で一緒に遊ぶことが成立するには、母子間で同じ動きを模倣し合うことが重要な要因になっている可能性を指摘できる。母親が子ども

に簡単な動作を提示すると、子どもは母親と似た動作を比較的すぐに模倣する。その様子を母親がしっかり見て、同じ動作を模倣することによって、遊びは楽しく展開していく。模倣せず見守るだけ、または全く他のことを母親が子どもにしてあげるという関係性の場合、遊びとして発展していかない。また、模倣するためには、互いによく見ることが必要条件と考えられ、視線や体幹の向きも母子間の相互作用の促進に影響を与えていた。さらに、動きのそのものの質に着目することも重要である。例えば、「優しくリボンを振る」「激しく大きく振り回す」では異なる動きの質が存在する。事例で検証してきたように、同じような動きの質で模倣し合うことによって、母子間のやり取りが活発に行われている。Laban の動きの視点を導入することにより、具体的にどんな動きをどのようにしたのか詳細にみることができ、母子間のダイナミックなやりとりを分析する指標になり得る。

本研究では、子どもが同じ動きを示していても、母親が気づかず、共振せずに遊びのイメージ共有が図れない事例も多く見られた。母親が心とからだを子どもと一緒になって動かし、身体表現をしていくことで、母親自身のこころとからだを開き、子どもの動きを見る力、感じる力の受容体にスイッチが入るように敏感になるのではないだろうか。こうした母子間のやりとりこそ、「からだとからだが通じ合っている時には、お互いの間に間主観性が存在し、「からだ」を通してのコミュニケーションが成立していると解釈することができる」岡本・浜田（1995）。子どもにとってこのような母親とのコミュニケーションの経験が、幼児期後期には他者へと展開し、砂上（2000）が、ごっこ遊びにおいても身体の動きの共有が重要であることを指摘しているように、他者とのコミュニケーションの基盤になっていくと考えられる。

幼児期前期の母子間のコミュニケーションはまだ動きを通したやりとりに大きく依拠していると考えられる。母子間で互いの何気ない動きをよく見て、動きを模倣しあうことを通して、互いの思いが共有され、一致した時に遊びが成立していく。従って、母子間のコミュニケーションが促進される要因として、母子間で同じ動きを模倣し合うことが重要な要因になっている可能性を指摘し、模倣しあう内容を多く含む創造的身体表現活動を推進していきたい。

注１）撮影に際し、身体表現についての研究であることを述べ、研究のみに使用する旨を参加者全員に伝え、さらに個別撮影の前に許可をいただいた母子を撮影した。

注２）分析者２名は、筆者の他、功刀梢氏に依頼した。功刀氏はお茶の水女子大学で舞踊を専攻し、舞踊作品分析を専門領域とし、動きの VTR 分析の実践を重ねた者である。評定は、確実にビデオに写っている項目のみ評定し、曖昧なものは二者で協議し、確定した。

謝辞

研究にご協力くださいましたＪ幼稚園の皆様、功刀梢氏に深く感謝申し上げる。

〈引用文献〉

小林芳文（2006）ムーブメント教育・療法による発達支援ステップガイド』メディカ出版、東京

鯨岡峻（1999）『関係発達論の展開』ミネルヴァ書房、東京、p.145

Morris, D. 藤田統訳（1980）『マン　ウォッチング　人間の行動学』 小学館、東京

岡本夏木・浜田寿美男（1995）『発達心理学入門』岩崎書店、東京

砂上史子（2000）「ごっこ遊びにおける身体とイメージ」『保育学研究』Vol 38, No. 2, pp.41-48

竹田契一、里見恵子（1994）『インリアル・アプローチ』日本文化科学社、東京

津守真、稲毛教子 (1961, 2006 増補版）『乳幼児精神発達診断法０才～３才まで』大日本図書、東京

上野一彦、海津亜希子、他（2005）『軽度発達障害の心理アセスメント』日本文化科学社、東京

The Transformation in Communication between Mothers and Their Children following Movement Activities

TAKANO Makiko

Abstract

How a mother and child communicate through movement was studied using video analysis of free play by mothers and their children. This study examined the transformation in communication between mothers and their children following movement activities (a one-off seminar). In addition, 2 activities were actually implemented to verify the effectiveness of creative movement instruction. One was unconstrained creative movement (unrestrained) while the other involved sitting quietly and playing existing games with the hands (tranquil). After the activities, changes in the free play by the mothers and their children were compared. The result was that unrestrained mothers and their children actively communicated. Mutual emulation of movement by mothers and their children may be a crucial factor that facilitates communication between a mother and child.